

## ダニエル書4章「王のへりくだり」

### 1A 平安の挨拶 1-3

### 2A 怯えさせた夢 4-18

1B 意味を告げられなかった知者たち 4-7

2B 非常に高くなった木 8-12

3B 天からの見張りの者 13-17

4B 聖なる神の霊 18

### 3A 王に届いた、いと高き方の決定 19-27

1B 驚きすくむダニエル 19

2B 強くなった王 20-22

3B 獣と住む王 23-27

### 4A へりくだりを学んだ王 28-37

1B 十二か月後の自画自賛 28-30

2B 直ちに実行された決定 31-33

3B 天を見上げる王 34-367

## 本文

ダニエル書 4 章を開いてください、私たちはついに、ネブカドネツアルによる統治の最後の部分を読みます。そしてそれは、ネブカドネツアル自身の回心、主なる神に立ち返るといふ驚くべき記録でもあります。

### 1A 平安の挨拶 1-3

<sup>1</sup> ネブカドネツアル王から、全地に住むすべての民族、国民、言語の者たちへ。あなたがたに平安が豊かにあるように。<sup>2</sup> いと高き神が私に行われたしるしと奇跡を知らせることは、私の喜びとするところである。<sup>3</sup> そのしるしのなんと偉大なことよ。その奇跡のなんと力強いことよ。その国は永遠にわたる国、その主権は代々限りなく続く。

ネブカドネツアル王自身が書いている手紙であり、その挨拶の部分です。その相手は、彼が支配していたあらゆる民族、国々、国語の者たちでありました。前回、金の像を拝ませた時に、「諸民族、諸国民、諸言語の者たち(3:4)」を集めて、それにひれ伏させたことを思い出してください。そのようなことを行っていたネブカドネツアルは、なんと天におられる神をほめたたえる内容の手紙を書いています。彼こそが王の王、主の主であるはずなのですが、本人が自分の上に主権者であられる神がおられることを認めています。

そして、この方の国がとこしえに続き、主権が限りなく続くとほめたたえています。彼は、統治を始めて間もない頃、自分の見た夢が人の像で、それが石によって粉々に粉碎して、その石が大きな山になったのを見ました。それは、永遠の御国であることをダニエルは解き明かしていました。「2:44 この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国はほかの民に渡されず、反対にこれらの国々をことごとく打ち砕いて、滅ぼし尽くします。しかし、この国は永遠に続きます。」

私たちは、強大な国々が世界を支配しているのを見ると、自分たちが全く無力であることを感じます。しかし、そこで永遠の御国が支配しているのを見ることは信仰が要ります。台風による暴風が吹き、豪雨が降っている時に、快晴の空を思い巡らすのが難しいように、です。ましてや、その当事者である王が自分に与えられている権威や力を思う時に、自分自身が神に支配されていると思うことは難しいことでしょう。しかし、ネブカドネツアルはそのことを悟ることができました。彼に神が憐れんで下さり、「しるしと奇跡」を起こして下さったからです。私たちも、力ある人のことを執り成す時に、神が介入して下さるよう、そのしるしと奇跡を願う祈りを献げたいものです。

彼は、「平安が豊かにあるように」と言っています。パウロやペテロの手紙の書き出しととても似ています。これは3章で燃える火の炉にダニエルの友人三人を投げ入れた時の彼の態度とは、大きく異なります。三人が火の中から救い出された後、彼は、「3:29 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神に対して不敬なことを口にする者はだれでも、八つ裂きにされ、その家はごみの山とされる。」と言ってその横暴な態度は変えませんでした。その彼が今や「平安が豊かにあるように」と言っています。その平安をどのようにして彼が得ることができたのか、それはへりくだりの中にありました。彼の受けた奇跡によって、彼はへりくだりを学び、そして平安を得ました。

そして、ダニエルの神、またダニエルの友人三人の神を、「いと高き神」と呼んでいます。前回の学び、王が燃える火の炉から彼らを呼び出す時に、「いと高き神のしもべたち(3:26)」と叫びました。数多くの神々がいる中で、この方はいと高きところにおられる、とみなしたのです。これまでのダニエル書の記述でも、バビロンの神々と彼らが信じる神との違いが強調されています。バビロンの知者たちは夢を示すことについてこう言いました。「2:11 王がお求めになっていることは、難しいことです。肉なる者と住まいをともにされない神々以外に、それを王の前に示すことができる者はおりません。」これまで自分が信じてきたバビロンの神々とは比べ物にならない方であり、はるかに高い所におられることを彼は認めたのです。

## **2A 怯えさせた夢 4-18**

### **1B 意味を告げられなかった知者たち 4-7**

<sup>4</sup> 私ネブカドネツアルが私の家で心安らかに過ごし、私の宮殿で繁栄を極めていたとき、<sup>5</sup> 私は一つの夢を見たが、それが私を恐れさせた。私の寝床での、様々な幻想と頭に浮かんだ幻が、私を

おびえさせた。

ここから、この手紙を彼は自分の統治の後半に書き送っていることを知ることができます。「宮殿で繁栄を極めていた」からです。2章における夢は、彼が統治を始めて間もない頃でした。これからこの国の行く末はどうなるのかと悩んでいたために、神が示してくださったのがその夢です。そして3章における金の像は、彼が国を、力をもって平定しようとしていた中期の頃でありました。軍事的また政治的に安定させるために、全バビロンにいる役人たちを集めて、自分を表す金の像を彼らに拝ませたのです。けれども今は、そのような政治的、軍事的不安定要因は消えて、彼がバビロンの建築事業に取り組むことができた時期に入っています。バビロンがいかに栄華に輝いた町であるかは、世界の七不思議に入っている「空中庭園」からも窺い知ることができます。

大きな事業はほぼ成し遂げて、それで彼は自分の家で心安らかにしていました。しかし、それは安逸と言ってもよいでしょう、多くの民が重税と苦役で苦しめられていたのです。そのことを気づかせるために、彼に神が夢を与えられました。快適にしているところに、突如として恐れが与えられました。しかし、それは良い恐れです。遅すぎて、神に滅ぼされるところから救い出される恐れです。バビロンの前はアッシリア帝国がその地域を支配していましたが、その首都ニネベの町は、ヨナによる説教によって悔い改め、災いから免れました。

<sup>6</sup> 私は命令を下し、バビロンの知者をみな、私の前に連れて来て、その夢の意味を告げさせようとした。<sup>7</sup> 呪法師、呪文師、カルデア人、占星術師たちが来たとき、私は彼らにその夢のことを話したが、彼らはその意味を私に告げることができなかった。

以前、彼が夢を見たときと同じように、バビロンの知者たちは彼の助けになりませんでした。今までと全く異なる次元の啓示でした。なぜダニエルが最後に来たのでしょうか？おそらく、秘密を最も告げることができる人を最後にとっておいたからだと思います。小さな事柄は、ダニエルの下にいる知者たちに任せていたのですが、まず彼らに尋ねてみたのだと思われます。

## 2B 非常に高くなった木 8-12

<sup>8</sup> 最後にダニエルが私の前に来た。彼の名は私の神の名にちなんでベルテシャツアルと呼ばれ、彼には聖なる神の霊があった。私はその夢を彼に話した。

ダニエルと言ってから「ベルテシャツアル」と言い換えているのは、手紙を読むバビロンの人々にとっては、ダニエルはこのバビロン名で知られていたからでしょう。けれどもダニエルという、イスラエルの神の名前が入っている名前を彼は使いたかったのだと思われます。ベルテシャツアルは、「私の神の名にちなんで」とネブカドネツアルは言っています。その名とは「ベル」のことです。これ

はあくまでも、習慣的に言っていることなのでしょう。

<sup>9</sup>「呪法師の長ベルテシャツアルよ、私は、聖なる神の霊がおまえにあり、どんな秘密もおまえには難しくないことを知っている。私の見た夢の幻はこうだ。その意味を言ってもらいたい。

ダニエルは以前の夢の解き明かしによって、バビロンの知者たちをつかさどる長官へと昇進していたので(2:48)、「呪法師の長」です。そして「どんな秘密もおまえには難しくない」と言っていますが、同時期にバビロンにいたもう一人のエゼキエルは、ツロについて預言しているとき、「28:3 あなたはダニエルよりも知恵があり、どんな秘密もあなたに隠されていない。」と言いました。つまり、ダニエルが夢を解き明かすことにおいて、全バビロンにその評判が広がっていたようです。

そして、「聖なる神の霊がおまえにあり」と言っています。私たちは簡単に「イエスを信じる者には聖霊が内に住んでおられる。」と言いますが、はたして周囲の人がどれだけそれを認めることができるでしょうか。ダニエルはネブカドネツアルと共に歳を取ったといっても過言ではありません。十代の時から彼に仕え何十年もいっしょにいます。その間、ダニエルは神の聖さについて証しすることができました。バビロンの神々には、この聖さがありませんでした。偶像というのは、元来、人間の欲望を表出するためのものです。金が欲しければ「マモン」を拝み、権力が欲しければ「バアル」を拝み、情欲を求めるならば「アシュタロテ」を求めました。だから聖さは存在しないのです。けれども、まことの神は、私たちが肉に従うのではなく、御霊に従うように導かれます。

そして、先ほどバビロンの知者たちが解き明かしをすることができなかった理由の一つとして考えられるのは、この夢の内容が、ネブカドネツアルのプライド、自尊心を激しく傷つけるものだった、ということです。彼のあり方を肯定するものであれば、いくらでも王にお世辞として語るができます。けれども、まことの神は私たちの悪を明るみに出されます。私たちが悔い改めて、光のところに來ることができるようになります(ヨハネ 3:20-21 参照)。しかし、これまでダニエルが本当に王のことを思って語ってくれていたことを、王は知っていました。自分のことも顧みずに、真実を語ってくれるというところに、彼の中に住まわれる聖なる霊を見たのだと思います。

<sup>10</sup> 私の寝床で幻が頭に浮かんだ。私が眺めていると、見よ、地の中央に木があった。それは非常に高かった。<sup>11</sup> その木は生長して強くなり、その高さは天に届いて、地の果てのどこからもそれが見えた。<sup>12</sup> 葉は美しく、実も豊かで、その木にはすべてのものの食べ物があった。その木陰では野の獣が憩い、その枝には空の鳥が住み、すべての肉なるものはそれによって養われた。

ダニエルは後で、この木が「ネブカドネツアル本人」であると解き明します。非常に高くなる木、そして鳥や獣にもその潤いを与える木ですが、同じくエゼキエルはアッシリアやエジプトのファラオを、

そびえ立つ杉の木として形容しました(31章)。

ですから、イエス様の喩えにおいて、神の国が大きな木に喩えられた時に、それを福音宣教の広がりとするのに、私は難しさを感じます。「マタ 13:31-32 天の御国はからし種に似ています。人はそれを取って畑に蒔きます。32 どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなって木となり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るようになります。」これは、神のことばによる広がりが、世の大きな制度に組み込まれて肥大化するように解釈できるのです。つまり、313年にローマ皇帝コンスタンティヌスがミラノ勅令により、キリスト教を公認し、それから392年にローマ帝国の国教にしました。こうした広がりなのだと思います。ですから、ネブカドネツアルが大きな木に喩えられているというのは、他人事ではないのです。キリスト教が世の権力を持てば、責任が問われるということです。

### 3B 天からの見張りの者 13-17

<sup>13</sup> 寝床で頭に浮かんだ幻の中で見ていると、見よ、一人の見張りの者、聖なる者が天から降りて来るではないか。<sup>14</sup> 彼は力強く叫んで、こう言った。『その木を切り倒し、枝を切り払え。その葉を振り落とし、実を投げ散らせ。獣をその下から、鳥をその枝から追い払え。』

これは神からの天使であります。天使の働きを聖書の中で見ますと、権力、権威、力は神から来ており(ローマ 13:1)、それを天使に神が託しておられるのを見ることができます(エペソ 1:21、ダニエル 10章など)。パウロはテモテに命じる時に、神の前にといいだけでなく、「選ばれた御使いたち」とも言っています。「I テモ 5:21 私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちの前で、あなたに厳かに命じます。」バビロンの王にも天使がいて、彼を見張っていたのです。

<sup>15</sup> ただし、その根株は、鉄と青銅の鎖をかけて、地に、野の若草の中に残せ。天の露にぬれさせて、地の青草を獣と分け合うようにせよ。<sup>16</sup> その心を、人間の心から変えて、獣の心をそれに与え、七つの時をその上に過ぎ行かせよ。<sup>17</sup> この宣言は見張りの者たちの決定によるもの、この要請は聖なる者たちのことばによるもの。これは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最も低い者をその上に立てることを、いのちある者たちが知るためである。』

「木を切り倒せ」とこの見張りは言っていますが、「その根株は、地に残せ」とも言っています。完全に根こそぎにするわけではありません。ここに主の、ネブカドネツアルに対する憐れみがあります。懲らしめというのは、いつもそうです。切り取られるのは非常に痛いですが、けれども、それは失われるためではなく、主は必ず私たちに、立ち上がるための機会を与えてくださいます。

この「七つの時」は、ダニエル書に出てくる他の「時」を考えると「年」であると考えられます。12



章に、「ひと時、ふた時、半時」とありますが、黙示録によればそれは三年半であることを知ることができます。つまり「時」は一年であり、「七つの時」は七年間のことです。七は神の数字ですから、神の定めた期間、そうなっているということです。

大事な宣言があります、「いと高き方が人間の国を支配」するということです。人がどんな計画を立て、どんな思惑で動こうとも、そして権力や知恵が与えられていても、いと高き方、天におられる神が支配をして、ご自分の思われるままに動かしておられるということです。そして、そうした権力でさえも、神がその主権によって与えている力なのだという事です。私たちがこの地で生きている中で、いろいろなことが起こり、不条理なこともたくさんあります。人間が行なっていることで、起こっている嫌なことはたくさんあります。けれども、それもが主によって、私たちの思いを超えるところにある御旨によって、起こっているということを知る必要があります。

そしてそのような中で、最も大事な素質が「低い者」ということです。主がすべてを行われることを認めて、主の御心に任せるということ。世においては、正反対のことを教えています。自分を高めなければ、何も得られないという哲学です。時に宗教までもが、「あなたが神をしっかり信じれば、幸せになれる。」という成功哲学に基づいています。しかし、福音によれば、捨てることによって得ます。マタイ5章5節には、**柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです。**とありますが、これは「へりくだった者」と訳すこともできます。私たちは、どんなことがあっても、そこには神のみこころがあるのだということを、へりくだって受け入れていく中で、神ご自身がご自分の御国を広げて行かれます。

#### 4B 聖なる神の霊 18

<sup>18</sup> 私ネブカドネツアル王が見た夢とはこれだ。ベルテシャツアルよ、おまえはその意味を述べよ。私の国の知者たちはだれも、その意味を私に告げることができない。しかし、おまえにはできる。おまえには、聖なる神の霊があるからだ。」

ネブカドネツアルは再び、ダニエルへの信頼を言い表しています。再び、聖なる神の霊があるからだと言っています。自分にとって都合の悪いことでも、悪でも、それでも言ってくれと言っています。けれども、これは一方通行ではありませんでした。ダニエルもネブカドネツアルを愛し、尊敬の心をもって仕えていることを次の節から読むことができます。

#### 3A 王に届いた、いと高き方の決定 19-27

##### 1B 驚きすくむダニエル 19

<sup>19</sup> そのとき、ベルテシャツアルと呼ばれていたダニエルは、しばらくの間驚きすくみ、いろいろと思いを巡らして動揺した。王は話しかけた。「ベルテシャツアルよ、この夢とその意味のことで動揺することはない。」ベルテシャツアルは答えた。「わが主よ、どうか、この夢があなたを憎む者たちに当

てはまり、その意味があなたの敵に当てはまりますように。

ダニエルは真にそう願っていたに違いありません。ネブカドネツアルは横暴な王でした。残酷で、無慈悲な王でした。けれども彼は、ネブカドネツアルの身にこの災いが襲いかかることを望みませんでした。それは彼を敬い、愛していたからです。「 I ペテ 2:18 しもべたちよ、敬意を込めて主人に従いなさい。善良で優しい主人だけでなく、意地悪な主人にも従いなさい。」そして愛は、「人がした悪を心に留めず(1コリント 13:5)」とあります。私たちは、まだ信仰を持っていない人の罪を暴くことが、務めではありません。その人の置かれている立場に寄り添い、そしてその人の益になることを考えます。そして、その中で主に仕え、他の人々とキリスト者は違うのだということを明らかにするのです。それから罪を指摘することもあるでしょう、けれども順番を逆にはいけません。

### 2B 強くなった王 20-22

<sup>20</sup> あなたがご覧になった木、すなわち、生長して強くなり、その高さが天に届いて、地のどこからも見え、<sup>21</sup> 葉が美しく実も豊かで、すべてのものの食べ物があり、その下に野の獣が住み、その枝に空の鳥が宿った木、<sup>22</sup> 王よ、その木はあなたです。あなたは大きくなって強くなり、あなたの偉大さは増し加わって天に達し、あなたの主権は地の果てにまで及んでいます。

ダニエルは、彼が強くなって天に達していることを強調しています。これは、神の領域に近づいているということです。王の王であるキリストの領域に近づいているということです。天下にネブカドネツアル王の栄光が輝いているということです。そして、「あなたの主権は地の果てにまで及んでいます」とも言っています。地の果てにまで至る主権、これもまた神の御国のようです。イザヤは、地の果てのことを鳥々といって、そこにまで神の主権が及ぶことを話していました。

これが危険領域ですね。そこに神を認め、へりくだれば問題がないのですが、権力者や知者が、それを認めず、神を思わず、神の領域に入るようなことを行っていく時、危険領域に入ったと言えます。例えば、自分が神自身であるかのようにふるまい、キリスト者にも自分を拝むようにしようとした権力者は大勢います。また医療の研究で、人の細胞に猿の胚を注入したり。

### 3B 獣と住む王 23-27

<sup>23</sup> しかし王は、一人の見張りの者、聖なる者が天から降りて来てこう言うのをご覧になりました。『その木を切り倒して滅ぼせ。ただし、その根株は、鉄と青銅の鎖をかけて、地に、野の若草の中に残せ。彼を天の露にぬれさせて、七つの時がその上を過ぎ行くまで野の獣と青草を分け合うようにせよ。』<sup>24</sup> 王よ、その意味は次のとおりです。これは、わが主、王に届いた、いと高き方の決定です。

いと高き方の決定、とダニエルは言っています。王のように権威が神から任されている者たちは、

自分も必ず見張られ、責任を取られることを知らなければいけません。王のように権力が権威を持っている立場において、自分の裁量でいかようにでもできる領域において、自分が命令系統の一番上にいるのではなく、自分を命令する神がおられるので畏れる必要があります。例えば自分が雇用者であれば、「コロ 4:1 主人たちよ。あなたがたは、自分たちも天に主人を持つ者だと知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。」という戒めがあります。

<sup>25</sup> あなたは人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べて、天の露にぬれることとなります。こうして、あなたの上を七つの時が過ぎ行き、ついにはあなたは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者にお与えになることを知るようになります。<sup>26</sup> 木の根株は残せと命じられていますので、天が支配するということをあなたが知るようになれば、あなたの国はあなたのために堅く立つでしょう。

この時は、「天が支配するということをあなたが知るようになれば」ということです。彼がこのことを知るまでの訓練であり、懲らしめです。

<sup>27</sup> それゆえ、王よ、私の勧告を快く受け入れて、正しい行いによってあなたの罪を除き、また貧しい者をあわれんであなたの咎を除いてください。そうすれば、あなたの繁栄は長く続くでしょう。」

勧告しています。正しい行いによって罪を除いてくださいと言っていますが、これは行ないによる救いを意味していません。主権者である王として、その治世において正さなければいけないことを話しています。ネブカドネツアルの栄華と富の背後には、重税があり、奴隷がいました。建設事業において、彼らは苦しんでいました。虐げていました。

#### **4A へりくだりを学んだ王 28-37**

##### **1B 十二か月後の自画自賛 28-30**

<sup>28</sup> このことはみな、ネブカドネツアル王の身に起こった。<sup>29</sup> 十二か月たって、バビロンにある王の宮殿の屋上を歩きながら、<sup>30</sup> 王はこう言っていた。「この大バビロンは、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が私の権力によって建てたものではないか。」

「十二か月たって」とあります。ダニエルからの勧告を受けてからもう一年も経っていました。聞いた時はその解き明かしを真剣に受け止めたかもしれませんが、一年も経てば忘れてしまいます。私たちの心は、時によって試されています。警告を聞いた時は、ふむふむと聞いています。そして、自分は大丈夫だと思っています。けれども、心がそこから離れて行ってしまうのです。

同じようなことが、エレミヤ書にもあります。バビロン捕囚の後に、僅かに残っていたユダヤ人たちは、王を恐れてエジプトに逃れようとしていました。それで彼らは、それが御心になっ



か、エレミヤに尋ねました。彼は祈りました。「十日たって、主のことばがエレミヤにあった。(42:7)」とあります。十日のうちに、初めに願っていたこと、つまりエジプトに下ることが先決であるという自分たちの願いや思い、考えを優先させていったのです。十日という期間が、彼らを試したのです。

そしてイエス様は弟子たちに、終わりの日というのはそのようなものであると警告したのです。主人に任されて食事を、しもべたちに与えるように任された者たちとして例えました。「マタイ 24:49-50 仲間のしもべたちをたたき始め、酒飲みたちと食べたり飲んだりしているなら、50 そのしもべの主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来て、」ということです。まだまだ帰るまいという心が、まだ主人が戻って来ない時に出て来たということでもあります。私たちが何を思っているか、それが時というものによって明らかにされます。

「私」という言葉が繰り返し出てきます。日本語の翻訳だと少なくなっていますが、英語だと I とか my とか何度も出てきます。これが高慢の種です。バビロンの王に対する歌がイザヤ 14 章にあります。その背後に明けの明星とも呼ばれる悪魔がいたことを知ります。「14:13 おまえは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。』」ここにも「私は」とか「私の」が繰り返し出てきます。その反対は何でしょうか？そうです「神の主権」です。「ロマ 11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」「私」ではなく「神」なのです。自分の生活のあらゆる領域で神の介入と支配を認めるのです。これがへりくだりの道です。

## 2B 直ちに実行された決定 31-33

<sup>31</sup> このことばがまだ王の口にあるうちに、天から声があった。「ネブカドネツアル王よ、あなたに告げる。国はあなたから取り去られた。<sup>32</sup> あなたは人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べるようになり、こうしてあなたの上を七つの時が過ぎ行き、ついにあなたは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者にお与えになることを知るようになる。」

「口にあるうちに」です。権力の与えられている者はこのようにして、さらに大きい力と権威のある存在から見張られているということです。もう既に高慢になっていた王ですが、最後通牒とその監視によって神は見守っていました。しかし、その一線を超えてしまったのです。

<sup>33</sup> このことばは、ただちにネブカドネツアルの上に成就した。彼は人の中から追い出され、牛のように草を食べ、そのからだは天の露にぬれて、ついに、彼の髪の毛は鷲のように、爪は鳥のように伸びた。

この状態はおそらく、現代で言うなら精神病の何かだったのだと思われます。王が突然、狂気の沙汰に陥りました。けれども王位は退けられていません。おそらく王の顧問たちは、ダニエルの

助言を聞いて、おそらくは彼をそのまま宮廷の中で守っていたのでしょう。ダニエルも、王の不在の期間、行政をつかさどっていたのだと思われます。彼に理性が戻った後で、顧問たちが彼にまた仕え始めるからです。

### 3B 天を見上げる王 34-37

<sup>34</sup> その期間が終わったとき、私ネブカドネツアルは目を上げて天を見た。すると私に理性が戻ってきた。私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。その主権は永遠の主権。その国は代々限りなく続く。<sup>35</sup> 地に住むものはみな、無きものと見なされる。この方は、天の軍勢にも、地に住むものにも、みこころのままに報いる。御手を差し押さえて、「あなたは何をされるのか」と言う者もない。

すばらしいです、理性が戻ってきた後に彼から出てきた言葉は、神への賛美です。このような目に合わせた神をののしってもおかしくありません。けれども、彼はこの辛い経験を、苦みを抱く原因にするのではなく、むしろへりくだる機会とするほどの神の知識を得ていました。

神の永遠性をまずほめたたえています。私たちは、目に見えるものに目を留めず、目の見えない方に目を留めます。「2コリント 4:18 私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。」そして、その主権をほめたたえています。まず、「無きものとみなされる」についてですが、イザヤ書 40 章に、「見よ。国々は手桶の一しずく、秤の上のごみのように見なされる。見よ。主は島々をちりのように取り上げる。(15 節)」とあります。こんなに神は大きな方なので、「君主たちを無に帰し、地をさばく者たちを空しいものとされる。(23 節)」のです。そして、「御手を差し押さえて、「あなたは何をされるのか」と言う者もない。」と言っています。神がなされることは、誰も止めることはできません。

<sup>36</sup> ちょうどそのとき私に理性が戻り、私の王国の栄光のために、私の威光と輝きが私に戻ってきた。私の顧問や貴族たちに求められて、私は王位に戻り、こうして絶大な権威が私に加えられた。<sup>37</sup> 今、私ネブカドネツアルは、天の王を賛美し、あがめ、ほめたたえる。そのみわざはことごとく真実であり、その道は正義である。また、高ぶって歩む者をへりくだらせることのできる方である。

すばらしいですね、主が彼を引き上げてくださいました。彼の威光と輝きも戻りました。次の使徒ペテロの言葉がネブカドネツアルにぴったりと当てはまります。「1 ペテ 5:6 ですから、あなたがたは神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神は、ちょうど良い時に、あなたがたを高く上げてくださいます。」神は恵み深い方です。神は立ち上がる者にはいつでも機会を与え、以前にもまして祝福することもなさるのです。

そして、主のみわざはことごとく真実であると賛美しています。自分は偽りであり、主の道が正

義であり、私は悪者である。主がアーメンであられ、私はちりあくたに過ぎない、ということです。これができる人は、へりくだった人です。イエス様の言葉を思い出します、「ルカ 18:14b だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」次回は、この教訓をさえ学ばなかったバビロンの最後の王ベルシャツアルについて学びます。残されているのは破滅のみです。私たち人間は、いつかどこかの時点で神の国が永遠であることを学びます。自分ではなく神が支配しておられるのです。それが早ければ、平安に満ちた生活をその後送ることができます。遅ければ遅いほど、砕かれる時の痛みは増します。

このようにして、ネブカドネツアルの生涯を見ました。あらゆる権威、力、位が与えられていたネブカドネツアルでした。しかし、そのネブカドネツアルをしても、神の人ダニエルのそばにすることによって、彼が天の主の下に入ることになったのです。神は、このようにして私たちの証しの力を与えられます。「Ⅰペテ2:12 異邦人の中にあつて立派にふるまいなさい。そうすれば、彼らがあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いを目にして、神の訪れの日に神をあがめるようになります。」これがまさに、ダニエルの生涯で起こりました。ネブカドネツアルが神をほめたたえたのです。そして続けてペテロ第 2 章には、「2:13 人が立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、14 あるいは、悪を行う者を罰して善を行う者をほめるために、王から遣わされた総督であっても、従いなさい。…17 すべての人を敬い、兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を敬いなさい。」とあります。主のゆえに王を尊び、その制度に従ったダニエルです。